

[39]

氏名	印藤 和寛
博士の専攻分野の名称	博士（文化交渉学）
学位記番号	博第 495 号
学位授与の日付	平成 29 年 3 月 21 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学位論文題目	富永仲基と荻生徂徠—楽律考を中心に—
論文審査委員	主査教授 陶 徳民 副査教授 松浦 章 副査教授 吾妻 重二

論文内容の要旨

本論文の主眼は、富永仲基と荻生徂徠を軸に近世日本の思想風景、とくに八代将軍徳川吉宗時代の楽律研究と音楽論の背景と特質を検討することである。論文は、序章、本論の四章、終章および付録の資料篇から構成されている。

序章「江戸の思想家 響く音楽論」において、富永仲基「誠の道」と荻生徂徠「古文辞学」の思想像、および各自の『楽律考』を撰したこの両者の音楽論に関する先行研究を検討し、論文の課題を設定した。

第一章「富永仲基の『誠の道』」では、富永仲基が遺した詩作、蘭皐（弟、荒木定堅の号）の詩集『鷄肋集』に付した仲基の叙文、末弟重（号は東華）の『九皐集』に寄せた仲基の序文、および三好棟明・矢木鳴鳳らとの交遊に関する仲基の詩などを解説することにより、仲基の親戚や交友関係、生活環境およびその目指した「誠の道」の含意を分析すると同時に、「誠の道」の形成に及ぼした中国の古典、朱子学と陽明学などの影響をも論じた。

第二章「富永仲基の『楽律考』」においては、仲基が復原した古代中国・朝鮮の音律の値と日本雅楽音律との関係について、日本の雅楽の音律は、古代朝鮮から伝わった音律と、それよりも二律分低い隋・唐初の音律がもとになっており、音楽としては唐の燕楽が伝来した。その後日本雅楽の音律は一律分低くなって今日に及んでいるという説を明らかにして近年の学説と比較検討した。また、仲基が音律に関する比較研究の際に法隆寺所蔵の洞簫（尺八）と牙尺を実際に使用したことを考証し、それは狩谷掖斎の研究に先立つものだったと究明した。

第三章「徳川吉宗による古楽復興の試みと徂徠の音楽思想—荻生徂徠の未完成佚書『大楽發揮』復原のために」では、徂徠の若年期の著書『大楽發揮』の各篇がどのような運命をたどったかを追跡し、「周の大楽」を復興しようとする徂徠の音楽思想の発展をその弟荻生北溪の関連論述も合せて四段階に分けて検討した。その上で、国宝「碣石調幽蘭第五」に関する山寺美紀子氏の研究成果を参考に、徂徠生前の琴楽研究に潜んでいた政治的含意は、その逝去後の元文三（一七三八）年九月一八日江戸城での琴復興に伴う雅楽演奏に現

れ、京都禁裏を凌駕しようとする大君吉宗の権力志向を反映したという仮説を提示した。また、徂徠「楽律考」の成立時期については、「楽制篇」と同時期、『大楽發揮』各篇の一つとして早くに（定説の、徂徠晩年にではなく）成立したものと推定した。

第四章「徂徠・仲基の周辺」においては、仲基の池田呉江社における師、田中桐江と荻生徂徠の関係、桐江の詩文集『樵漁余適』および桐江の甥田中蘭陵の『蘭陵遺稿』、井狩雪溪という隠れた大学者の『雪溪遺稿』、長い間謎とされてきた「酔墨子」、日初寂頭『日本春秋』などに関する考察や、および司馬遼太郎が「摂津最古の都市」と呼んだ池田を舞台に行われた田中桐江と呉江社、蘭阜、李溪の内田書院と菅茶山、頼春水、中井竹山、葛子琴および河野伯潜らの交流に関する探究を通じて、仲基を取り巻く人々と地域の文化、とくに仲基の思想と著述の形成に大きな影響を与えた田中桐江、井狩雪溪と日初寂頭に関する重要な懸案事項を解明した。

終章「富永仲基・荻生徂徠と雅楽」では、第二、第三章のまとめとともに、仲基『楽律考』における音楽理論、実証主義（考証学）の特徴について、將軍の政策を唐の太宗についての論評として俎上に載せていること、西洋音楽という調性 tonality についての初歩的な検討、「日本ノ楽ハ高麗ヨリ傳ふる」とする荻生北溪と同様に、古代朝鮮の音楽との関係を論じていることなどを指摘した。

なお、最後の「資料篇」に以下の研究成果と文献、計 15 項目が収録されている（ここにより重要と思われる項目のみを羅列し、項目六、七、十、十一、十二、十三などは省いた）。

- 一、富永仲基『三器』度考の復原尺度表（表Ⅰ）
- 二、諸家による復原主要尺度表（表Ⅱ）
- 三、富永仲基『楽律考』の復原音律表（表Ⅲ）
- 四、仲基・徂徠・諸家による復原黄鐘値比較表（表Ⅳ）
- 五、雅楽音律名表
- 八、荻生徂徠『護園随筆』（抄）
- 九、荻生徂徠『楽律考』・『楽制篇』
- 十四、富永仲基年譜稿
- 十五、富永仲基著作

論文審査結果の要旨

本論文は先行研究をふまえて幅広い発掘調査を行い、手堅い考証と分析を通じて多くの新知見を提示し、吉宗を中心とする享保時代史の重要な側面を掘り起こした労作である。

まず、仲基については、その『楽律考』に対する周到な考証により、現在の日本雅楽の音律の来歴と特質を解明した。また、その『翁の文』において唱導された「誠の道」の含意を、その道を実践しようとした弟荒木蘭阜の生涯や、日初上人の『日本春秋』と仲基最晩年の歴史執筆構想との関連などに対する跡付けを通して論述した。

次に、徂徠については、『大楽發揮』と名付けられたその未完成の書物と、太宰春臺が

写した『楽制篇』や徂徠自身が撰した『度量考』・『楽律考』などとの関連性および成書時期に関する仮説も注目すべき研究成果である。そして、聖人による中国古代音楽を将軍のもとで復原しようとした徂徠の「礼楽」研究と「古文辞学」における政治的含意に関する鋭い指摘は、丸山真男以降『政談』や『太平策』を中心に論じられてきた徂徠の思想像に修正を迫るものである。

このように、享保時代の攝津池田地方史と上方・江戸双方の楽律研究のあり方と意味合いに光をあてた労作として、本論文は高く評価できる。しかし、関連資料や研究成果が盛り込まれ過ぎたため、論文構成上のバランスと緊密さおよび論理展開上の整合性と明快さにやや欠けているという問題が生じた。この問題は今後の研究のなかで克服されるだろうと思う。

よって、本論文は博士論文として価値あるものと認める。